

氏名	ホーラク サブリナ ヘドイグ
ヨミガナ	ホーラク サブリナ ヘドイグ
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第538号
学位授与年月日	平成29年3月27日
学位論文等題目	〈論文〉 人工のパラダイス
	〈作品〉 パラダイス探求ー新変相図
	Vision
	FORCE!
	Prayer Circle
	Eli Fontana discovers Paradise
	Fontana Eli Fontana
	M a d r e n a l
	One perfect moment
	Mirador
	Distant Dream
	After the war
	Bonbon
	Aikea Guinea
	Mirador
	〈演奏〉

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	0 JUN
（論文第1副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	佐藤 道信
（作品第1副査）	東京藝術大学	准教授	（美術学部）	三井田 盛一郎
（副査）	東京藝術大学	准教授	（美術学部）	シュナイダー ミヒャエル
（副査）			（）	
（副査）			（）	
（副査）			（）	
（副査）			（）	
（副査）			（）	
（副査）			（）	

（論文内容の要旨）

私は2012年から「パラダイス」をテーマとして作品を作ってきた。その「パラダイス」というテーマへの関心は、私と日本との関係から生まれている。日本人とオーストリア人のハーフとしてオーストリアに生まれ育ってきたために、日本に対して少し変わった見方をしているかもしれない。幼年期とティーンエイジャー時代を合わせて4回しか訪日していなかったので、当時は日本語が出来ず、日本を観光客の目からでしか見ていなかったのも、日本の良いところ、楽しいことしか経験しなかった。私にとっての日本は、素晴らしい秘密をたくさんもっている謎の国だった。そのために、私は日本に対して「パラダイス」のイメージを持っていた。そのイメージは日本の真の姿ではないと分かっているが、そういう「パラダイス」はどこかに存在している。自分の頭の中や思い出の中だけにでもあるだろう。

私のようにオーストリアで育ってきた人間には、「パラダイス」という言葉は強く夏と結び付く。なぜならば、オーストリアの冬は、東京周辺の冬と比べて、暗くて寒いので、「パラダイス」と言えば、「夏」「南国」などのような言葉が思い浮かぶ。夏でオーストリア人に人気がある好きなことは、家族や友達と一緒に室外プールに行き、水遊びをしたり、日向で寛ぐことだ。

よく指摘されることだが、自然のビーチではなくて、人工のプールの風景を描いている理由は二つある。一つ目はとってもシンプルな理由である。私も家族と日本に来た時に、ビーチではなくて、よくプールへ行ったから、「パラダイス」「夏」と「プール」が私の頭の中で強くつながっていて、自然のビーチに対して懐かしい思い出は持っていない。二つ目は、人工のプールを見ると、人間は「パラダイス」をどのように想像して創造しているかが分かることだ。

私の「パラダイス」をモチーフとしている作品は、すべて左右対称かそれに近い構図を持っている。意識して「対称性」のある構図を選んだわけではないのだが、描く時にいつも左右対称の構図が「相応しい」と感じていた。他の作家が描いた「パラダイス」を研究してみると、対称性の構図がよく使われていることに気が付いた。「パラダイス」を描写するのに左右対称の構図が優れているかもしれないと思うようになった。今ではそれを意識するようになり、作品の構図で対称性と非対称性のバランスをよくとれば、「パラダイス」をもっと上手く表現できると思っている。

第1章では、まず、日本人のレジャー行動とレジャー施設について説明する。私の「パラダイス」を表している作品は、すべて私が「現代文化の中のパラダイス」だと主張している「レジャー施設」の室外プールを撮影したものなので、私が研究すべきテーマであると思っている。特に「スパリゾートハワイアンズ」と「オーシャンドーム」のような室内の大型スパリゾートは、室内で自然は人間の理想どおりに再現されているから、「人工のパラダイス」の代表例である。

第2章では、「パラダイス」を描写するために、「パラダイス」はいったいどのような所か定義する。そのために、「パラダイス」の概念の由来を調べた。西洋では、そのイメージはキリスト教に根差していると考えられる。東洋だと、浄土真宗の浄土という所もあり、常世の国やニライカナイという、「パラダイス」の特徴を持っている場所がある。世俗的な視点だと、トーマス・モアの「ユートピア」という有名な島国があるが、現代文化における「パラダイス」的な空間もある。1章で説明するプールや大型スパリゾート以外にも、遊園地や大型水族館が「パラダイス」の概念と共通する特徴を持っている。第3節では、それらのあらゆる共通する特徴と、自分なりの「パラダイス」の定義について説明する。

第3章では、「人工のパラダイス」の視覚化について説明する。「パラダイス」を、これまで、美術の歴史や現代美術でどのように視覚化してきたかについて述べる。美術の歴史から例として挙げる二つの作品は、ボスの「快樂の園」と「当麻曼荼羅」図である。両方の作品には、「パラダイス」的空間を表すために、対称性の絵画構図が使われている。ボスの「快樂の園」は三連祭壇画で、「エデンの園」と「肉体的なパラダイス」を表している左翼と、中央のパネルは対称性のある構図で表されている。しかし、地獄を表している右翼の構図は、非対称性の絵画構図を持っている。「パラダイス」と共通する特徴がある浄土を表している「当麻曼荼羅」図も対称性の絵画構図を持っている。対称性や非対称性それぞれが作品を見る人の頭の中にある感情を引き起こす。それを絵画構図で上手く利用できるように、その感情、関連語句は何か調べて、「ポジティブ」と「ネガティブ」なイメージに分けた。「左右対称性」に当てはまる言葉は、例えば、平和、バランスであるから、「パラダイス」を表すのに優れていると思っている。しかし、例えば、「左右対称性」には「固い」と「つまらない」という言葉も関連しているので、「左右対称性」の構図に「非対称性」の要素も含まれるのが、表現方法として最も優れていると考えられる。しかし、第1章で説明するレジャー施設の建築構造は左右対称性ではない。人間が、「パラダイス」を実際に体験するためには、視覚的に体験するのとは違う構図が必要となることに驚いた。室内のレジャー施設にまったく対称性がない自然の風景が再現されているのはその理由だからかもしれない。

第4章では、自分の作品の今までの発展と、「Mixed Race」という私の背景がこれまで作品にどのように影響したかについて説明する。数年間に、私は絵画構図や素材で実験できるように、昔の大型の、東京の群集を表している作品から離れて、小さいスケールで作品を作り始めた。実験の中で新しい方向性を見つけたので、少しずつ大きい作品を作る予定ができた。新作の「Celestial」で久しぶりに少し大きめの

作品を作ってみた。「パラダイス」というテーマを「パラダイスへの探求」というストーリー性のある視点から表現したいと狙っている。人間が、憧れの「パラダイス」へ至るために、どのような犠牲を払っているのかというストーリーが語られている。構図の研究で学んだことをもちろん適用して、この作品で、対称性の構図に非対称な要素を加味して作った。また、この作品は「上部」と「下部」に分かれている。「下部」には、「パラダイスへの探求」をしている主人公の「探求」の苦しみが、紺色の湖で表されている。「上部」には主人公が到着している「パラダイス」が鮮やかな色味で表されている。作品の絵画構図、色味や要素でそのような「Duality」（二重性）を表現したいと思っていた作品である。

（論文審査結果の要旨）

本論文は、人々がプールでくつろぐ風景を「人工のパラダイス」として描いてきた筆者の、コンセプトと表現の展開を論述したものである。

筆者のパラダイスイメージが、なぜプールと結びついているのか。理由は二つあるらしい。第1に、筆者が育ったオーストリアは冬の寒さが厳しく、パラダイスが夏や南国を連想させたこと（ただヨーロッパ中央に位置するオーストリアには海がなく、プールになった）。第2にオーストリア人と日本人の間に生まれた筆者が、幼少時の夏休みに家族と来日して遊んだのが、プールだったためという（ビーチではなく）。そして筆者が「パラダイス」より「人工のパラダイス」に惹かれるのは、人間がパラダイスをどのように想像し、現実世界につくったかがわかるからだという。

第1章「パラダイスを体験するレジャー施設」では、筆者の「人工のパラダイス」イメージに最も近い「温泉プール」について概観、分析する。温泉だから日本になるが、福島県いわき市の「スパリゾートハワイアンズ」（1966年）、宮崎県の「シーガイア・オーシャンドーム」（1993～2007年）をとりあげ、とくに屋内にビーチやヤシの木が再現された後者を「人工のパラダイス」の代表例とする。第2章「パラダイスという言葉の定義」では、パラダイスのどのような属性が「人工のパラダイス」で再現されているのかを検証する。広義でパラダイスに含まれる「エデンの園（楽園）」「天国」「ユートピア」「浄土」「常世の国」と、現代文化の人工のパラダイスとしての「プール」「スパリゾート」「遊園地」「大型水族館」を比較し、美しさ、豊かさ、隔離性などを共通点として指摘。しかし宗教的パラダイスが“魂の理想郷”であるのに対して、「人工のパラダイス」は娯楽や快楽、快適やリラクゼーションが演出されているとする。第3章「視覚的な人工のパラダイス」では、ボッシュ、ラキブ・ショー、森万里子、自作品などから、パラダイスには完全性を表わす左右対称構図が向いており、自作品でもそれを採用しているとする。そして第4章「私の作品について」で、これまでの作品と提出作品「Celestial—新パラダイス変相図」について解説している。

筆者は来日当初、圧倒されたという東京の群衆を描いており、そこからプールの群衆、左右対称構図によるプールと人物たちへと変化している。提出作品ではさらに「人工のパラダイス」（プール）から「パラダイス」（天国）への旅という、ストーリー性をもつ新たな展開を示しており、現在進行形の探求であることが分かる。

本論文にはキリスト教的な世界観や美意識に、日本での生活や幼少時の記憶が混じり合った、独特の世界が展開している。学位論文に十分な内容として、審査会の承認を得た。

（作品審査結果の要旨）

Horak Sabrina Hedwigさんの博士号審査申請作品「パラダイス探求—新変相図」は、不思議な軽薄さが、印象として鑑賞者に与えられる。そして博士論文で展開された「人工のパラダイス」ではヨーロッパ、日本、現代におけるパラダイスの構造が論証されていく。彼女は、日本人とオーストリア人の両親を持ち、日本との接点を保ちながらオーストリアで育った。このことだけでもヨーロッパの重厚さと日本のペラペラな軽薄さを対比的に意識するのに十分な要素であっただろう。

最終的に提出され中心となった作品「Celestial—新パラダイス変相図」を含めすべてのシリーズには、

図像である身体に対して、僅かな要素を除いては背景が示されない。背景が示されないどころか、図像はジグソーで切り抜かれパーツに分けられ構成され、白い壁面にかけられる。登場する人物（身体）たちは文字通り宙釣りにされている。パラダイスを求める人間たちがいるとすれば、彼女が表すパラダイスのイメージは荒涼としている。

論文「人工のパラダイス」にはヒエロニスム・ボス「快樂の園」がヨーロッパのパラダイスとして中心的に引用され、図像的な分析も試みられていく。これに対比される“人工のパラダイス”は、ディズニーランドを含む日本のレジャー施設が置かれる。この対比は、宗教とサービス産業という意味から“信じさせること、信じること”“欺くこと、欺かれること”の対比にもなるだろう。提供者と需要者の質の違いはあるが、ここには方法の共通性が観察される。つまり、物語を成立させるための状況設定と細部の作り込みである。これによって、この提示された世界を信者や需要者は、信じたり欺かれたりすることを幸福や楽しみに変換する。細部こそがパラダイスの構造を支える仕掛けだとするなら、提出された作品群のイメージは、このパラダイスのイメージとは程遠い、背景と細部を欠いたものになっている。

作者は背景と細部の問題に極めて敏感なのではないか。論文中に掲載されている図版48、過去の作品49、50では、渋谷の街の雑踏から得られたイメージから見事に背景が、俯瞰という手法で消される。さらにこれを徹底させるためには図像をジグソーで切り抜くことが必要だった。これによって背景もそれを出していきかずの細部も完全に取り除かれるのだ。絵画を作るということを考えると、文字や音声の言語とは異なる文法や語法が必要となるだろう。そしてこの方法は、表現者個々が新しく発見していくものだ。彼女は図像を物理的に切断するという方法を発見した。切断することのあるプロセスと捉えてみると、次に接続される先が見えてくるかもしれない。作者にとってパラダイスを求める動機は止むを得ない切実なものであろう。しかし、宗教やサービス産業における信仰や欺きの中には、どうやらパラダイスを発見していないようなのである。このことは、論文で展開されたことはズレを持っている。自身の作品を欺かないためには、現時点では信仰やある種の虚構を示す要素を全て切り取ってしまわなければならなかったのではないかと理解する。作品は次への展開を示唆する段階に入っているのだ。

以上のことから、本作品群を絵画独自の方法を展開させたものとして高く評価した。

（総合審査結果の要旨）

Sabrina Hedwig Horakの博士論文及び修了制作の審査の報告をいたします。本審査にあたり、審査員は主査はO JUN、論文第一副査は佐藤道信先生、作品第一副査は三井田盛一郎先生、副査にミヒャエル・シュナイダー先生で構成し査読を行い指導をしながら本審査を迎えた。博士論文題目は「人工のパラダイス」。研究作品題目は「パラダイス探求―新変相図」。本学生は2012年より“パラダイス”をテーマに作品制作をしている。オーストリアと日本の血を持つ本人は、幼少の頃より日本とヨーロッパを行き来し双方の言語、文化、教育を受けてきた体験からやがて娯楽、レジャー施設の在りようがそれぞれの風土のなかで創出される楽園思想、パラダイスの変性体であることに関心を持ち、それが作品制作への強い動機となりまた今回の博士論文執筆への起因となっている。日本での楽園のイメージが古来の浄土、楽園信仰から近代に入り庶民の娯楽様式とそれに伴う様々なレジャー施設のバリエーションをリサーチすることでその人工的な欲求の形や機能、異形性を書き出していることは、彼女にして可能な意欲的な試みであると評価できる。“日本人”でもある彼女が日本を見る“外国人”の目がこの日本近代の特異な風景を眺めたスケッチとも言えそうな内容である。日本とオーストリアのそれぞれの楽園思想が人々の生活圏のなかでどのように反映されているか、またその具現化としての形体、様式を研究をすることによって自己の制作の根拠と創作原理をより明快にした。ただし自作についての論考の感想は、東西の古典、近現代美術や絵画を比較し自己の創作の根拠を探しながら創作への欲求がその者の成長過程のなかでの個人的体験と場所や環境を背景にして醸成されてゆくプロセスが明快に描かれているものの、論考の深さと密度においてはなお物足りなさは否めない。やや急いだ感が残った。修了制作は中央部の大作とそれを取り囲むように、2012年からシリーズとして制作してきた単体の作品で際どく彩色された水着の男女の姿がくつろぐ様を描いたレリーフ上の作品を点在させた組み作品である。特筆すべきは昨年から起こした新展開である。そ

れまで人が水辺でくつろぐシーンを単体で作って来たがそこに「物語」が導入されたことである。それによって時間性、方向性が表現に練り込まれた構成となった。ただし、その制作上の変化が作家のなかでまだ十分に消化され質実が充たされるまでには至っていない。この新展開の行方は次作によって深められることで作品としての強度と魅力を増すであろう。論文第一副査を務めていただいた佐藤先生には論文の執筆の当初から最後まで論文論考全体に大変懇切丁寧な指導をいただいた。シュナイダー先生は本人と同国人ということで論考について歴史的な事実、ヨーロッパ圏の楽園信仰や概念について常に細かく深いニュアンスまで母国語と英語によって指導をいただいた。三井田先生からは論文の中身に関する指摘や指導の他に特に制作上の問題点と可能性について非常に精緻で分析的、かつ示唆に富んだアドバイスをいただいた。彼女の作家としての一歩先を照らしてくれるような導きをしていただいた。論文発表の後では各教員から様々な感想と作品の形体、具体的な制作方法についての質問がなされた。人間の全身像が多く描かれていて絵画性の強いイメージであるが、すべてが板材から切り出された形（パーツ）であること、新作においてはその登場人物が全て女性であること、また水着を着ている理由、作品形体がシンメトリックな配置によって宗教的雰囲気が出ていることについてなど。本人はよくそれらについて明快に答え、今後の課題も含め次作についての抱負も話した。今後の期待とともに課題でもある。最終試験では一般常識や論文、制作に関する質問に対していずれも満足する回答をした。審査の全てを終了し教員全員は本学生Sabrina Hedwig Horakを博士号取得に相応しいものと判定した。